

「痛みはないか」

「はい……」

「よく似合ってる」

部長の手が離れた。部長の視線を追うように下を向くと、かわいらしいパステルピンクが目に入る。初めての貞操帯だ。

大事などころを固いもので覆われている——もう自分では外せないのだと思うと、いけないことをしているみたい。

「恥ずかしいです……」

「三上はかわいいからピンクが似合う。オムツもハートのが一番似合っているし」

「や、やめてください……」

家ならまだしもここは職場。貞操帯をつけるのは仕事の一環だし、ここには誰もおらず二人きりだけれど、関係が変わったことを思うといやらしい方に意識してしまう。

三日前——告白の後、部長の家にお邪魔した。そのまま三泊して、今朝も一緒に出勤した。つまり、もう何日もずっと部長と過ごしている。その間、たくさんたくさんいやらしいことを——。

「さあ、写真を撮ろう」

「え……本当に撮るんですか」

以前にもオムツの写真は撮られている。でも貞操帯を撮るなんて。オムツと違い、恥ずかしいところが見えているのに。

「顔は写さない。それに写真を見てもこれが三上だとわかるのは俺だけだろう」

「それはそうですね……」

でもやっぱり恥ずかしい。だって部長に装着された貞操帯を部長に撮られて、しかもそれをみんなに見られてしまうのだ。

「撮られるのが恥ずかしいなら、プライベートだと思えばいい」

「っ！ 嫌です」

そんなのもっと恥ずかしい。プライベートでそんな写真を撮られたら、その写真をどうするつもりなのか……何に使われてしまうんだろう、なんていやらしいことを考えてしまうから。

「やっぱりまだ恥ずかしいか」

「あ……」

——赤ん坊は恥ずかしがらない。

それにこれは仕事。

無言のまま足を開く。顔を背けると、カシヤツとシャッターの音が聞こえた。そのまま音

が連続する。カシャカシャカシャカシャ——やはり今回も連射だった。たくさん撮られていた。薄目を開けて部長を見ると、角度を変えながら恥ずかしい場所に携帯のレンズを向けていた。

(ダメ……)

そんなふうにならたら反応してしまう。

「三上」

部長の声に愉悦が混じる。恥ずかしい。バレてしまった。

「いや……部長、見ないください……」

でもどうしてバレたのだろう。だってペニスは貞操帯が邪魔をして少しも見えないはずなのに。

「いやらしいな、三上。会社で貞操帯をつけて、写真を撮られて勃起して」

「やあ……」

「昨日もあんなに射精したのに足りなかったか」

部長がくつくつと笑う。思いを告げるまでは優しいばかりだったのに、好きだと言い合ってから、部長は少し意地悪になった。

でも昨日も一昨日も、部長にたくさん体を愛された。一日中一緒にいて、ずっと体のどこかが触れていた。三上が視線を向ければキスをされたし、何度も頭や頬を撫でられた。それにくさくさドキドキして、なのに性的なことよりもお世話をしてほしい気持ちの方が勝っていて。そんな気持ちに部長もすぐ気付いてくれて、オムツを撫でて排尿を促し、排尿を終えると褒めながら新しいオムツに替えてくれた。そのときはお世話をしてもらえる喜びで性的な興奮はなかったのに、こうして思い出すとなぜか勃起してしまう。

「今は仕事中だぞ。……だが三上は赤ん坊だから、射精ではなく精液のお漏らしならしてもかまわない」

射精と精液のお漏らし——いったいどんな違いがあるというのだろう。ただ言い方が違うだけ。だって部長は家でも三上が射精する度に「お漏らししたな」と言っていたから。

「お漏らししたいか」

したくないわけがない。でも部長の言うとおりにここは職場で、三上は今仕事中で。そう思うとそんないやらしいおねだりはできない。

首を振り、射精はしないと外に伝える。すると部長はカメラを構え直し、陰部の撮影を再開した。

「まだ撮るんですか」

すでにじゅうぶん撮ったはずなのに。

「様子が変わったからな」

「様子……?」

「陰囊が持ち上がってる」

「やっ……」

反射的に手が動いた。しかし「仕事」という言葉が頭に浮かび、隠してしまう前に止める。

「こっちの写真の方がよく売れるよ」
「っ！」

そんなものを使われたら、撮影で興奮したのだと見た人にバレてしまう。
「せっかく作るんだからよく売れる方がいいだろう？」

部長の言うことはもつともだ。販売のための開発課。だから売れなければ意味がないし、仕事の評価も上がらない。

けれど、感じているところをネットにアップされてしまうなんて。感じているふりならまだしも、陰囊が上がった状態なんて、決してごまかしようのない体の反応だ。

「三上、大丈夫だ。三上のいやらしいところだということは誰にもバレない」

バレる、バレないの問題ではない。それにもう、一番知られたくない相手には知られてしまっている。だからただ単に恥ずかしいのだ。

「俺は三上のいやらしい写真でたくさん売ればすごく嬉しい」

「部長……」

「三上も本当は心から嫌だと思っっているわけではないだろう？」

「や……そんなこと……」

どうして知られているのだろう。恥ずかしいだけで本心は嫌だとは思っていないし、いやらしいところをもつと部長に見てほしいと思っっている。そして撮ってほしい。ねっとりじつくり、このはしたないところを残してほしい。でもそれをネットにあげられるのと、嫌じゃないと認めるのが恥ずかしいだけ。

どう答えようかと悩んでいると、部長が陰囊をねっとり揉むように撫でた。

「あっ」

「早く撮影を終えてやらないと三上のペニスが痛くなってしまおうな」

「あ……やだ、そんな」

わかっていながらも終わりにしてくれたいのに。でも長引かせているのは三上自身だという自覚もあつて。

「どうする？ 三上」

「え？」

「このままゆっくり撮影を続けてペニスが痛くなるまでいじめてしまおうか」

「やつ、やです！ そんなのつらいです……」

「つらいか」

部長が三上に覆いかぶさり、正面から目を合わせながら言った。「三上は、本当はどうしてほしい？ 三上が本当に嫌だと思ふなら無理強いはいし、してほしいことがあれば叶えたいんだが」

ずるい。そんな言い方をされたら……素直にならなければならなくなる。

「部長……」

視線を合わせ、部長のシャツを引く。

「僕のいやらしい写真を……たくさん撮って販促に使ってください……」

言ってしまった。でももう後悔はない。早く撮ってほしい。そして仕事でだけけど、ご褒美として精液のお漏らしをさせてほしい。

部長は頷きカメラを構えた。さつきよりも深く腰を折り、まるで会陰を撮るような低い位置からシャッターを切る。

「え、部長？」

どうしてそんなところを。そんな低いところでは貞操帯なんて写らない気がするのに。

「どうした」

部長は訊き返しているのにシャッター音は止まらない。

「あの……どうしてそんなところを？」

「下から見たときの貞操帯の様子も必要かと思っただけ」

「っ！ そんな……」

「陰囊のアップを撮っているわけではないよ。貞操帯の先に排尿用の穴が開いているだろう？ その様子を撮っているんだ」

「おしっここの穴……？」

「そうだ。三上がおしっこを出す穴を撮っているんだよ」

くくく

「ただいま」

「おかえりなさい。すぐご飯の支度しますね」

一緒に住むようになってからのルーティン。平日、部長が残業になったときは三上がご飯を作って部長を待つ。帰ってきたら一緒に食べてお風呂に入り、少し甘えさせてもらってから一緒に寝る。

本当は家事をする必要はないと言われていた。けれど元々できることだし、何かしていないと落ち着かない。それに部長がいない部長の部屋で一人でいてもすることがないし、ご飯を作っておけば、部長はおいしいおいしいと言ってたくさん食べてくれるから。

「そうだ。これからしばらく排泄の練習をするよ」

箸でかぼちやの煮物を挟みながら部長が言った。

「練習……トイレですか？」

本来なら食事中にするような話ではない。しかしたくさんの育児書を読み、育児について想像してきたせいも、不思議と汚いものという感覚が薄まっていた。

「いや、逆だよ。人が増えると言っただろう？ 三上は排泄すると体の動きやおしゃべりを止めてしまうから、気付かれないように排泄できるようにならないと」

「……そ、そうですか？」

気付かなかった。でも思い返してみれば止まっていたかもしれない。

「それにすごいやらしい、かわいい顔をする。うっとりして気持ちよさそうなの」

「そんな……！」

さすがにそれはないだろう。確かに排尿は気持ちいいけれど、そこまでのことは——。
「見たらすぐにわかる。排泄が終わるまで、じっと見つめていたくなる。だが人が増えたら
そうもいかないからな。だから自然に排尿できるよう練習をしよう」

「……本当に、その……他の人の前でするんですか」

「仕事中、排泄なしで過ごすつもりか？」

「それは……」

そんなこと、できるはずがない。だってこの数か月、尿意を感じる度に我慢することなく
排尿をしてきたせいで、排尿ごとの間隔がとて短くなってしまった。平日は仕事に意識が
向いているせいかもしれない日もあるけれど、週末はたいてい、午前中だけで五回は
排尿している。

「……わかりました」

話はそれで終わった。その後は一つ一つ料理の味を褒めてもらったり、好きな食べ物の話
や懐かしい給食の話をしたり。

そして夕食の片付けまで終えて、少しの休憩。

三上が洗い物をしている間に部長が作っておいてくれたミルクを、ソファでのんびりと飲
ませてもらう。でも食後なので、小さな哺乳瓶で戯れのように吸う程度だ。

「三上」

ミルク中の呼びかけ。まだ話す必要があるかはわからないので、視線だけで応える。

「かわいい」

部長がご飯で膨らんだお腹をそつと撫でた。「たくさん食べたな」

独り言のようだった。でもどうしても気になったので、舌を使って乳首を出す。

「食べ過ぎですか」

「そんなことない。もう少し太らないと」

「今がちょうどいいぐらいです」

それに太ったら部長に抱っこをしてもらえなくなってしまう。それだけは絶対に避けたい。
でもこうして膨らんだお腹をかわいいと言っただけで撫でてもらう時間は好き。

「部長」

話したいことがあるわけではない。ただ甘えたくて、足の上ののり、向かい合う体勢に変
えて胸をぎゅぎゅと押し付ける。

「たくさん甘えてもらえて嬉しいよ。今日は沐浴にしようか」

「え——でも」

普段から、一緒に入る時間があるときは体を洗ってもらっている。でも沐浴と言われると
きはボディタオルではなく部長の手で、ペニスや皮を剥かれずに綿棒を差し込むことで洗わ
れる。

普通より何倍もいやらしい洗い方。けれどその分時間がかかるので、沐浴はいつも週末だ
けだ。

「それともいつもどおりの方がいいか」

「いえ、でも時間が……」

「だが、これから三上には少しお兄ちゃんになってもらわないといけないからな。今のうちに少しでも甘やかしておきたい」

「お兄ちゃん？」

大人と言われないので子ども扱いということは変わりないだろう。しかしお兄ちゃんとはいったい何のことなのか。

「さっき言っただろう？ バレない排泄ができるようにならないと。その練習を始めるんだよ」

（あ……そっか……そうだった……）

本当に人前で排尿させられるかどうかは半信半疑。だってとてもいやらしいし、バレたら大変なことになる。でも部長がすると言っているのだから、やっぱりするのだろう。それなら部長に迷惑をかけないよう、しつかり練習しなくては。

「はい、わかりました」

赤ん坊扱いしてもらえなくなると思うとすごく寂しい。でも工作中、下着姿で過ごすことになるよりは——。

風呂上がり、手にしたオムツを見ながら、部長が感嘆の息を吐いた。

「ああ……三上はもう兄ちゃんだな」

「や……」

部長が手にしたものを見て、沐浴で高ぶった心がスツと冷めるのを感じた。

「見てごらん。お兄ちゃんオムツだよ」

どうやら以前から準備はしてあったらしい。部長が三上に見せたのは、パンツタイプのオムツだった。でもちゃんとハートだ。薄いピンク色のオムツ。濡れると赤いハートが浮かび上がるもの。

「お兄ちゃんな三上を見てみたいな」

「お兄ちゃんな僕……」

「ああ。赤ん坊の三上もかわいいが、少しだけしつかりしたお兄ちゃんの三上も見たい」

「ん……」

本当に赤ん坊扱いが終わってしまうのだと思うと寂しくて、悲しい。

でも部長が見たいなら——。

頷くと、部長が嬉しそうに頬を緩めた。

「オムツをしようか」

「はい」

三上がベッドに寝転がると、部長が一瞬動きを止めた。

「……部長？」

しかし、すぐなんでもないように動き出す。

「三上はちゃんとオムツができて偉いな」

そう褒めながら三上の足を一本ずつオムツに通し、腰を持ち上げウエスト部分に指を入れ

る。

「お腹は苦しくないか？」

「大丈夫です」

「緩くは……ないかな。まあオムツ漏れをしてもかまわないから」

足を閉じたままオムツを穿かされると、胸が締め付けられるような寂しさを覚えた。恥ずかしいところを見てもらえない。でもこれが部長好みのお兄ちゃん。それにちゃんと練習しないといけないから……。

「どうかな」部長が三上のお腹をそつと撫でた。

「あ……」

「出せそうか」

これまでずっとオムツにするのは尿だけで、排便のときはトイレを使わせてもらっていた。でも最近、なんとなく部長は排便も求めているような気がしていた。

でもどうしてもまだその一步を踏み出すことはできなかった。

「ちーだけ……」

小さな声で言うと、部長はわかったと頷いた。

言いたいこともあるだろうに、いつもこうして三上の気持ちを優先してくれる。

「じゃあ、ほら。ちーしてごらん」

合わせられた「ちー」という言葉。甘やかしの時間の始まりだ。いや……いつでも甘やかされているけれど。

「ん……」

三上が頷くと、部長は正面から三上の足を開いてオムツの中心を見下ろした。恥ずかしい。でも足を掴まれながらの排尿はすごく好き。尿が染みて、ハートがいくつも浮かび上がるのをいやらしい目で見ている。ほしい。

「ああ、出てきたな」

「んっ、ちーいっばい出るっ……」

「じゃあ、ちーをしながらかこつちまでおいで」

「えっ？」

部長が三上の足を下ろし、ベッドから降りた。そして一歩ずつゆっくりと後ろに下がっていく。

「いや、部長、ちー！」

「ちーしながらハイハイでおいで」

「あ……」

（おしっこ……出しながら……）

練習が始まったのだとわかった。ちゃんとできるようにならないと——そう思って身を起こすと、たったそれだけの動きでも排尿は勝手に止まってしまった。

「あ……」

「三上っ？」

「出ないっ……」

「もう全部出てしまったか」

首を振って違うと答えると、「じゃあまずは立ったまま出してみようか」と部長が目の前に戻ってきた。

縦るように腕を伸ばすと、三上の腕を首に回させてベッドから降ろし、腰を支えて立たせてくれる。

「ちーの続きを出してごらん」

「ん……」

「出始めたら教えてくれ」

ぎゅっと抱きつきながら、目を閉じて残りの尿を出す。

「あ……ちー出てる……」

そう言うのと、背中に触れていた手が腰に下りた。そしてぐつと引き寄せられたと思った瞬間、部長が一步後ろに下がった。つられて三上も足を踏み出す。

「あっ」

そのまま一步一步、ゆっくりゆっくり歩かされる。

「ちゃんと出てるか」

「や、止まっ……」

答えると、部長が動きを止めた。

「ではもう一度出してごらん」

~~~~~

それから毎日、職場でも自然な排尿の練習をした。

仕事中はほとんど座ったままなので、パソコンを打つ手を止めないこと。それから、しゃべっているときは口の動きを止めないこと。

「それから次のメールでは——あっ」

「三上」

でもどうしても意識が排尿の快感に向いてしまって、頭が働かなくなって、何を話していたのか、今から何を話そうとしていたのかを忘れてしまう。

でもそんな三上を、部長は一度も叱らなかつた。優しい目で三上にほほ笑みかけ、「それで、続きは？」と促してくれる。

「続きは、えっと……」

頭の中はオムツの中が温まってく快感でいっぱいだ。貞操帯がなければもつと気持ちよく排尿できたのに。でも貞操帯が邪魔なおかげでより強く排尿感を意識し、いやらしい気分になれる。

「三上」

優しい呼びかけ。目が合うとつい甘えたくなくなってしまふ。でも仕事で、と頭の中で繰り返す。



返す。

「あ、えっと、あの……」

「……昨日届いたメールは？」

「あつ」

それくらいなら出せるかもしれない。尿を止めないように意識しながらプリントアウトした書類を探す。

「ありました」

（僕、しゃべりながらおしっこしてる……）

「どんなグッズがほしいって？」

「えっと……」

文章を読もうとすると、余計にいやらしい気分になってしまう。だって仕事をしながらだ。仕事をしながらオムツに排尿を……部長に見られながら……。

「あつ……」

「……かわいい声だ」

部長が諦めたように笑った。「ペニスは苦しくないか？」

「……苦しいです……」

もうこれ以上は無理、と首を振る。だってもう貞操帯は苦しいし、パンツタイプのオムツは寂しい。今すぐにでもぎゅっと抱きしめ、ヨシヨシしてほしい。

——前はこんなじゃなかったのに。前はちゃんと仕事に集中できたのに。

「そうか。苦しいのはつらいな。どんなふうにつらい？」

「あ……おち……おちんちんが……おつきくなって」

尿の出が少なくなり、やがて止まった。でももう勃起を始めているし、部長がいやらしいことを言ってくれているので物足りなさは感じない。

「大きく？ なれたのか」

「貞操帯の中が……パンパンで……」

「三上はオムツに排泄する赤ん坊なのに貞操帯なんてつけているのか」

顔がカアアツと熱くなった。貞操帯をつけたのも、オムツを替えているのも部長なのに。でも不快には思わない。それどころか、もつといやらしいことを言ってほしくなる。

「ン……赤ん坊だから、自分でえっちなことをしないように、です……」

「そうか……三上は貞操帯がないと自分でえっちなことをしてしまうんだな」

「っ……」

何を言っても部長に勝てる気がしない。でも今は勤務中——部長がこんなふうになるのは珍しい。

しかしその疑問は、ちらりと視界に入った時計によって解消された。

（休憩……）

なんて切り替えがうまい人なのだろう。視線を時計から部長に移すと、安心させるように頷かれた。

このまま、もう少し部長と話してられる。

「えっちな赤ん坊だ」

「っ……はい……」

でも三上にいやらしいことを教えたのは部長だ。だから三上が悪いわけではないはずなのに。

「今もえっちなことをしたいと思ってるのか」

「っ……は、い……」

昨日は排尿の練習に時間がかかってしまい、射精させてもらうことができなかった。たった一晩出さなかっただけで、こんなにも下腹部が重苦しくなるなんて。

「見てみよう。オムツは本当に濡れているかな」

それはもう質問ではなかった。手を引かれ、後ろにあるベッドに寝転がる。

「部長……」

三上はいつもどおり下はオムツ、上はシャツを羽織っただけの状態だった。だからもう、オムツが濡れているかは一目瞭然。

「ああ、話しながらちゃんと出せたな」

「ん……お話、しながら出しました」

「だがえっちな顔になっていたよ」

「……すみません」

どうしても部長に見られていると思うと恥ずかしくて、いやらしい気分になってしまう。こんな表情、誰にも見せたくないから頑張って練習しないといけないのに。

「昨夜はおちんちんの世話をしてやれなかったからな。今出して、午後に備えよう」

事務的な言い方に興奮が高まっていく。期待で心臓がドキドキと痛む。

職場での射精も、最初こそ抵抗があったものの、今はもう慣れてしまった。それでも一応視線だけでドアの施錠を確認してから、身を任せる。

「部長、おちんちんむずむずします……」

「ああ、すぐに楽にしてやる」

濡れたオムツ、それから貞操帯が外される。だらりと体を投げ出していると、硬くなったペニスを握られた。

「あっ！ や、部長っ」

まだ拭かれていない。さっき尿を出したばかりで汚れているのに。

「ん？」

「おちんちん、先に拭いてください……」

恥ずかしいお願い。でも汚れたままよりはずっといい。

「どうせ濡れる」

「あっ」

部長の手が動き始めた。このままでは汚いと頭ではわかっているのに、たった一日半いじられなかっただけで疼くペニスは簡単に快感を追ってしまう。

「ああっ、あっ、や、部長っ」  
「どうした」

部長が手を止めた。でももうすでにイきたくて、拭いてほしいという気持ちは消えていた。だから欲望のまま、おしゃぶりをねだる。

「おしゃぶり……」

「三上はもうお兄ちゃんだろうか？」

「やつ！」

パンツタイプを使うというだけでこんなに寂しい思いをしないといけないのか。オムツ替えでは股間をろくに見てもらえず、射精の際のおしゃぶりもだめだなんて。

「やだぁ……」

くくく

「じゃあ早速会議を始めよう。二人ともエイジプレイについては調べてきたか」

席に着いて早々、部長の言葉に山瀬と浅井の二人が頷いた。カバンからファイルを取り出し、浅井が口を開く。

「いただいた資料にあった『性行為用グッズ』は挿入ありきで考えていいんでしょうか」

いただいた資料。そんなものを作っていたとは知らなかった。最近残業していたのはこれを作っていたからだだったのか。三上は説明用の資料のことなんて何も考えてもいなかった。ただ自分がうまく排尿できるようにされるかと、そればかり。

(最低だ……)

自分の無能さを自覚し、胸がズクンと痛む。

「それはかまわない。だがアンケートによると行為の度に必ずしも挿入を伴うというわけではないようだから、オナホルのようなものでもいいだろう」

「赤ん坊のおもちゃに見えるような外見のオナホールなら子ども部屋にもなじみますね」

浅井の言葉に部長が満足げに頷いた。

楽しそうだ。きつと部長は、本当はこんなふうには仕事をしたかったのだ。三上との仕事なんて、まるでままごとだった。

浅井と部長の二人だけで、話はどんどん進んでいく。

「ところで、赤ん坊とのセックスというのはどういう感じなんですか」

「セックスというより、挿入を伴わないときは抜いてやるという形だろう」

抜いてやる——部長の言葉に、つい昨夜の行為が浮かんでしまった。部長は「明日に備えよう」と言っつて、ミルクを飲む三上の妻えたペニス握って抜き、勃起させ、射精させた。

「あくまで赤ん坊だから、射精させるのも世話の一環ということでしょうか」

「そうだ」

部長が頷くと、浅井はしばし口を閉ざした。そして書類に視線を落としてから、部長を見据える。

「それならカラーはパステルに統一した方がいいですね。確か貞操帯の売れ筋はピンク、クリーム、水色の順で、オムツの一番の売れ筋はピンクのハートのもの。……パステルピンクで、不要な凹凸がないシンプルなオナホールはいかがでしょう」

今日異動してきたばかりだというのに、浅井はすでにデータの分析までしてきているようだ。最初からいる三上の方が置いてかれている気分になる。

「シンプルなオナホールか。しかしそれならすでにセルフ課が作ってるんじゃないか」

セルフ課……そんなものがあるなんて初耳だった。でもこの二人はSM課から来たというのだから、オナニー専門の課があってもおかしくはない。

「そうですね。でも……ああ、それならぬいぐるみに設置できるタイプはどうでしょうか。普段はぬいぐるみとして飾っておけて、使うときだけオナホールを取り付ける。電動オナホールにすれば動かさなくても射精できますし、はたから見ればぬいぐるみを抱っこしているだけのように見えます」

「それは面白いな」

斬新な発想に、部長が身を乗り出した。きっとこのまま話が決まっていけるのだろう。

しかしそのとき、ずっと黙っていた山瀬が口を開いた。

「射精に繋がらなくてもいいんですよね」

「繋がらないってなんですか」浅井が首を傾げた。

「興奮材料。プレイとして、例えば濡れると透明になるオムツとか」

「わ、エロ……」

「それもいい発想だな。面白そうだ」

部長が興奮したように頷いた。先ほどの楽しそうな表情は、三上と二人のときには見せたことがない。

「透明になる………というと、尿を吸収することで光の乱反射を——」

自分の発案から話題が逸れたというのに、浅井は気にしていないようだった。むしろ山瀬の発案に、さつきよりも表情を生き生きとさせている。

「でもそれだと尿の色が——」

三人はあれこれと意見を出し合い続けた。でも三上には濡れたものが透明になるという原理もわからないし、素材などの専門的な話になってからは三人が何について話しているのかもよくわからなくなった。でもわからないからといってただぼうっとしているわけにはいかないの、無言のまま、メモをとった。三人が話していることを——どうせ三人ともすべて頭に入っているのだろうけれど——すべて書き起こし、記録する。別にそれを求められることがなくても、それを見れば三上が自分で調べ、勉強することができる。それで明日までに理解できるようにして、できれば何か意見も言えるようにして——。

(できるかな……)

だって何もわからない。三人はもうどここの部署に相談するとか、どこの工場がとか、サイズがどうか、予算との兼ね合いがとか——。

結局一度も話題に入れないまま、昼休憩の時間になった。

「もうこんな時間か。熱中すると時間があつという間だな」

「でもなんとか実現できそうじゃないですか」

「そうですね。あー、ほんと異動希望出してよかった」

「なんだ、浅井。お前自分で希望したのか」

「そうですね。これでやっと部長とまた一緒に働いて、先輩とは離れられると思ったのに……なんで先輩も一緒に異動してるんですか」

「何だお前、その言い草。俺がいなかったら寂しいくせに」

「寂しい？ 先輩がいなくて俺が寂しい？」

休憩時間になったのに、三人の話は止まらない。

仕事は仕事、休憩は休憩、という部長の部下らしくすでに誰も仕事の話はしていないけれど、結局三上が話題に入れないというのは同じこと。

「寂しいだろ？ 俺がいないと眠れないくせに」

「そもそも一緒に寝たことないじゃないですか」

どうやら山瀬は浅井にちよつかいを出すのが好きで、浅井はそれを邪険にしている、という仲のようだ。浅井は面倒そうな表情を浮かべているけれど、のけ者状態の三上から見ればうらやましい。

「……お前ら相変わらずだな」

部長が少し呆れたように笑った。それに反抗するように浅井が言う。

「やめてください」

「俺は浅井の面倒を見る役として一緒に異動になったんだよ」

「求めてません」

「俺以外じゃ、お前と一緒に異動になったやつが可哀想だろうが」

「どういう意味ですか」

「都築部長だって大変な思いをするし」

「先輩の世話の方が大変ですよ、部長」

「俺に振るなよ。でも俺はお前らとまた働いて嬉しいよ」

一緒に働いて嬉しい——三上にも言っているセリフだ。何度も言ってもらったけれど、響きが違って聞こえてくる。

「お昼……買ってきます」

どうせ三上の存在は不要だ。三人の視界に入っていないことは承知していたけれど、本当にこの場から消えてしまったかった。

これまではお弁当を二人分作ってきて、部長と一緒にイチャイチャしながら食べていた。でも昨日の夜、部長が「明日は弁当を作らなくていい」と言ったので、今日の分はない。

同じお弁当が二つ。きっと部長は、それを見てどういう関係なのかと問われるのが嫌だったのだろう。でも三上もそんなことは想像できていた。だから、違う中身になるようにたくさん作るうと思いい、買い出しもしているんな食材を用意していた。

でも、そのときはそうと言えなかった。元々部長は外食派だった。だから、「二人分、中身

は違うのにするので」と言ったところで、部長がお弁当を食べていけば「誰に作ってもらったんですか」なんて冷やかされる——そういう懸念もあったのかもしれないと思ったから。そしてたぶん、その判断は正解だった。部長がお弁当を食べるのを見れば山瀬はストレートに訊きそうだし、浅井は嫉妬の炎を燃やしただろう。

財布を持って席を立つ。部長のご飯は気になったけれど、三人の邪魔をするわけにはいかなかった。

ドアノブに手を伸ばしたとき、背後からガタツという音が聞こえた。

「三上、待ってくれ。俺も行く」

振り向くと、部長と視線が交わった。しかしすぐ、部長の視線は二人に向かう。

「お前らは弁当だったな」

「ここで食べていいですよね」

「かまわない」

部長が隣に来たとき、さりげなく腰を押された。

部屋を出て人気のない廊下を歩く。

「あの……すみませんでした」

「三上？」

「僕、何の役にも立たなくて」

今日だけじゃない。今までずっと役に立っていないかった。でも仕事を覚えてきたとか、少しは役に立ててるとか、そんな顔して調子にのって。でもそれは全部部長の気遣いによる思い込みだとわかってしまった。

「うるさくて驚いただろう」

もしかしたら、「そんなことはない」と否定してくれるかもしれないなんて……しかし部長は話を変えた。「二人ともいいやつだから」

「……そうですね。そんな感じがします」

心が死んでいく。無になっっていく。でも今の三上の状況は自業自得だった。調子にのって、甘えていたから何もできない。開発に関する勉強もしてこなくて、ただ部長との日々を楽しんでいただけ。だから——。

~~~~~

昼休み、公園のベンチでカバンから巾着袋を取り出す。中身はなつかしの白米おにぎりだ。それでも部長用のお弁当を作るときに一緒に炊いたご飯なのでパサパサしないし、冷めても柔らかくてふっくらしている。

部長のお弁当はしっかり作った。甘味のないだし巻き玉子、ひじきの煮物、一口サイズのハンバーグ、ほうれん草の胡麻和えと、ミニトマト、隙間を埋めるブロッコリー。

(……食べてくれるかな……)

食べ物を粗末にするような人ではない。でも誰が作ったのか訊かれるのが嫌で、食べる場

所を探させてしまっているかもしれない。

(やっぱり明日からは作っていいか確認しよう……)

無味のおにぎりをかじる。塩もついていないけれど、冷凍ごはんではないというだけでこんなにもおいしい。

でも今は味わっている時間なんてない。少量の水で流し込み、通い慣れた図書館に向かう。グッズ課を出るとき、部長の視線を感じた。そのことに気付いたとき、少しだけ引き留めてもらえるかもと期待した。でも部長は何も言わなくて。矢島とご飯を食べると言っているのだから引き留められるわけではないのだけれど、寂しかった。

でもそんなのがままだ、と胸の中で自分を叱責する。そんなふうには甘えてばかりだからだめなのだ。もういい加減自立しないと。今は勉強。とりあえずクビや異動にならないように、部長に家から出て行けと言われてしまわないように、一つ一つ丁寧に頑張っていかなないと。

信号を渡り、角を曲がる。昼時だからか、道にはサラリーマンが多かった。ひとときの解放感なのか、みんな明るい顔で歩いている。

自分もいつか、あんなふうには昼休みを過ごしてみたいな、と思う。その日の失敗や、自分のダメさ加減にうんざりして過ごすのではなく、前向きに。

でもそのためには、やはり勉強だ。仕事がちゃんとできるようになれば自信もつく。

(開発関係の本、いいのがあるといいな)

今まで開発関連の棚には近づいたことがなかった。だからもしここで思うような本が見当たらなければ近くの図書館から取り寄せてもらうか、週末に他の図書館に行くしかない。でも開発関連の本がなかったとしても、社会人としてのあれこれみたいなのがあれば読みたい。とにかく今はなんでもいい。今の三上には何も足りていないから。だからどんなことでも吸収して成長しなければならない。

図書館の前に着くと懐かしい気持ちでいっぱいになった。異動してからここへは一度も来ていないのでかなり久しぶりだ。それに以前はただ時間を潰すために来ていたようなものだったのだから、こうして目的があつて来るとわくわくする。

階段を上り、図書館に入る。その入り口のところで、突然声をかけられた。

「おい」

聞き覚えのある声、呼び方。振り返ると、父親が立っていた。

~~~~~

部長が足の間にペニスを挿入し、腰を揺らした。大きな亀頭が、だらりと垂れた陰囊を揺らす。

こういうとき、部長は潰してしまわないようになのか、三上の陰囊を手で包んで守ってくれることがある。その優しさが性感に繋がって、三上のペニスはすぐにガツガチに硬くなってしまふ。そしていつもあつという間に高まり、部長より先に射精してしまうのだ。

「あつ、あつ」

「タマが硬くなってきたよ」

「あつ、やあつ」

まだ陰嚢は温かくて大きな手に守られている。

「あつ、あつ、ぶちよ、ぶつ、あつ」

完全に起ち上がったペニスがぶるんぶるんと揺れている。手の位置をずらしてほしい。陰嚢を持たれるのも好きだけれど、もう少し上——ペニスを握って、抜いてほしい。

「ああつ！ あつ、あつ」

「楓は気持ちよくなるのが上手だな」

「ああつ！ んっ、あつ」

口の中が寂しかった。喘げることには違和感を覚えてしまう。

「やあつ！ ぶちよ、あつ」

「ん？」

部長の体の動きが止まった。でもそのせいで、今度は足の間の太さを意識してしまう。

(おつき……)

太い。そして硬い。三上のもとは比べ物にならない。

「どうした」

「あ……えつと、おしゃぶり……」

「だが口が疲れてしまったんだろう？ 今日はお兄ちゃんとしてイってごらん」

「うう……やだあ……お兄ちゃんでもおしゃぶり！」

お兄ちゃんと言われながらの赤ん坊扱いがいい。お兄ちゃん扱いは嫌。そう言うと、部長がぎゅつと抱きしめてきた。

「部長……？」

「かわいいな。楓は本当にかわいい。もうお兄ちゃんなのに、甘えん坊だ」

「あつ……」

求めていたセリフ。それに部長も興奮するセリフだ。

「んっ……僕お兄ちゃんやなの……ずっと赤ん坊がいい」

「ああ、そうだな。今日と明日はずっと赤ん坊オムツで過ごそうな。風呂は沐浴で、たくさんミルクも飲もう」

「んっ！」

しかし部長はなかなかおしゃぶりを取ろうとはしてくれなかった。だから部長の空いた手首を握り、代わりに親指を吸う。

「っ……楓」

「んっ、ちゅ……」

ちゅうちゅうと吸うと、部長が腰の動きを再開させた。気持ちいい。

「んんっ、んっ、んちゅ、んっ」

指先を舐め、それから吸う。哺乳瓶からミルクを飲むときのように舌で潰すと、部長の動



きが激しくなった。

「んんっ、んんっ」

ペニスが揺れる。ぶるんぶるんと振れている。

「んっ、んんっ、んんんっ——！」

部長がぎゅっと陰嚢を強く握った瞬間、下腹部の奥がキュンとなった。直後に、ズクン、とペニスが脈を打つ。

「あ……イ……？」

「いったのだろうか……？」

「楓……」

部長のペニスはまだ硬いまま。だから今感じている脈動は三上のものだ。

「あ……あ……うそ……」

下を向く。しばらくペニスを見てみると、それは次第に力を失い始めた。

「あ……僕……」

会陰を擦られ、陰嚢を持たれ。部長の親指を吸って、揺れるペニスを意識するだけでいつてしまった。

「上手にイけたな」

「ん……部長……僕、いった……？」

「ああ、いったよ」

「うそ……」

信じられなかった。でも、もうずっしりとした疲労を感じていた。射精直後の独特なやつ。だからいったことには間違いがないようだった。

「楓、中に入りたい」

8万5千字、103ページです。

よろしくお願いいたします！

商品開発部・育児グッズ課2—サンプル—

gooneone (ユーザーわんわん)

2021/6/30

メール:gooneonegooneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter:@gooneone11

LINE:gooneone